



太陽の子

さいたま市立常盤小学校だより
令和6年11月号(第8号)
令和6年10月31日発行

【学校教育目標】

心身ともに健康で 思いやりの心をもち 主体的に学ぶ常盤っ子の育成

喜んで登校 満足して下校

【めざす児童像】

- よく考える子
- 思いやりのある子
- たくましい子
- かかわりあいを大切にする子

あきらめない

校長 藤田 昌一

現在、本業の落語はもとより、某番組で俳句の段位獲得者として、また、ワイドショーのコメンテーターとしても活躍している「立川志らく」師匠。二十年ほど前は、「らく塾」を開催し、月に一度、ご自宅で一般の方にも落語の稽古をつけてくださっていました。

私は、この「らく塾」に3～4年ほど通っていたことがあります。4年生の国語の教科書に「ぞろぞろ」という噺が取り上げられており、実際にクラスの子どもの前で演じてみたいと思ったのがきっかけです。(しかし、「ぞろぞろ」は、素人には難しいということで却下。子どもにも分かりやすい狸がでてくる噺などを教わりました。)

*

落語家の師匠の自宅で、直接稽古をつけてもらえる機会ですので、私以外の常連は、プロ志望の方や、天狗連(大学の落研等で経験があり、アマチュアで活動している方)など、上手な方ばかりでした。その中に、アルバイトをしながら、お笑い芸人や落語家の道を目指している当時20歳代半ばの「立川らく兵」さんがいました。(今年、真打昇進。10月8日と9日に真打披露落語会があったばかりです。)

プロ志望だけあって、当時から口調はよく、私が1年で1席なんとか話せるようになっている間に、3～4席もの演目を自分のものにしていました。

*

らく兵さんは、29歳で正式に弟子入りしましたが、これまでの間に様々な試練が訪れます。普段はとても誠実で真面目なのですが、人付き合いが苦手(とてもシャイな人)で、人間関係の鬱憤がたまりやすく、酒が入ると人が変わったようになることがあったようです。そのしくじり等のため、師匠からありとあらゆるペナルティを言い渡されます。

破門、謹慎、亭号はく奪、二つ目から前座降格…。この中で、一番重いのは破門です。師匠に破門を言い渡されると、廃業するしかないというのが、芸事の常識です。しかし、らく兵さんはあきらめませんでした。大好きな落語をこれからも演じ続けていくため、師匠の志らくに謝罪をし、破門から1年後に復帰を認められたのです。

*

私も真打披露興行に駆けつけましたが、演目の「火焰太鼓」、「茶の湯」とともに、師匠の志らくからもお褒めの言葉がでるなど、「らく塾」で一緒に習っていたころとは雲泥の差、言い表せないくらい腕を上げていました。(真打なので、あたりまえなのですが…。)

自分の選んだ道を不器用ながらも、どんな失敗や困難にもめげず、あきらめない心をもって進んでいったことで、道が拓いたのだと思います。「立川らく兵」師匠、真打昇進おめでとうございます。*真打は師匠と呼びますが、志らく師匠との判別のため、最後だけ、「立川らく兵」師匠としました。